

近世神道史の一齣

－天台宗、延暦寺、日吉社について－

John Breen

日吉山王社の社司と延暦寺の僧侶との確執は、寛文年間（1661－73）から燻っていたが、天和年間（1681－4）になると、寺社奉行、天台門跡、輪王寺門跡等を巻き込む大事件という形をとって勃発した。

本報告では、この大事件の力学を先ず紹介し、次に社司と僧侶との確執、およびその確執が導いた大事件がなぜ起きなければならなかったのかを追求する。最後に、事件自体は、どういう歴史的意義をもつものかを検討してみる。

この大事件における社司が目指したものは、日吉社の延暦寺からの「離脱」だった。なぜその事件が起きたのかとなれば、究極的には日吉社と延暦寺の近世的关系、およびその関係を育んだ近世国家の形成過程そのものに求めるべきだろう。報告では、1) 中世天台宗の近世的生まれ変わり、2) 吉田神道の近世的台頭、乃至3) 近世初期における、天台宗と吉田神道との緊張に満ちた関係をさぐることによって、日吉社で発生したこの大事件の重層的な原因を突き止める。

歴史的な意義に関してだが、この大事件は、明治初年の神仏分離令を引き金に発生した分離の「近世版」の観を呈するものでもある。この近世版が明治初年の有名な、暴力をともなった日吉の分離事件の再評価を我らに迫るかもしれないとさえ思われる。それはつまり、明治初年の日吉社における分離が、急に勃発した、「天皇制国家」がしかけたものでは必ずしもないことになるからである。むしろ、明治の分離事件は社司側にも、また僧侶側にもはやくから神仏を分離する志向があった結果起きたと考えた方が妥当かもしれない。また、近世を振り返った時に、日吉社と延暦寺との関

係が典型的な近世的なものであったのか、それとも異例的近世的なものであったか、という問題も考慮する必要が自然に生まれてくるように思われる。